

## 寄稿文 図書館ネットワーク専門委員会と私

図書館システム・ネットワーク専門委員会の2分科会の発足から図書館ネットワーク専門委員会まで20年間に、専門委員や事務局など、100人を超える図書館職員が携わってきました。

もちろん、専門委員会に直接関わっていなくても、ISBN総合目録や館種を越えた相互貸借、単館所蔵の分担保存など、多くの図書館及び図書館職員が関わって、全国的に見ても素晴らしい図書館ネットワークが構築されています。

そこで、当専門委員会に関わりが深い方々や現専門委員の方々に、図書館ネットワーク専門委員会との関わりや想いを綴っていただきました。

- システム・ネットワーク専門委員会からネットワーク専門委員会へ  
熊谷市立熊谷図書館 油橋 将行（平成7～23年度）
- 埼玉版ISBN総合目録草創のころ—図書館ネットワーク専門委員会と私  
埼玉東萌短期大学附属図書館 片野裕嗣（平成7～11年度）
- 図書館ネットワーク専門委員会と私  
さいたま市立北図書館 中島 孝一（平成12～14・25～28年度）
- 図書館ネットワーク専門委員会に参加して  
朝霞市立図書館 南田 詩郎（平成24～28年度）
- 図書館ネットワーク専門委員会と私  
川越市立中央図書館 彦野 靖二郎（平成23～28年度）
- 図書館ネットワーク専門委員会と私  
鶴ヶ島市立図書館 松崎 風夏（平成28年度）
- 図書館ネットワーク専門委員会に参加して  
加須市立加須図書館 阿部 浩和（平成19～28年度）
- 図書館ネットワーク専門委員会に携わって  
埼玉県立熊谷図書館 村中 登（平成11～13・17・18・26～28年度）

## システム・ネットワーク専門委員会からネットワーク専門委員会へ

熊谷市立熊谷図書館

油橋 將行

初めに、この度、ネットワーク専門委員会が20周年を迎えるにあたり、現在もまたこれまで活躍いただいた専門委員の皆様、県立図書館事務局の皆様、ご協力いただいている県内図書館職員の皆様に改めて御礼とお祝いを申し上げます。発足当時から委員としてお世話になっていた一人として、思い出話を書かせていただこうと思います。

埼玉県立図書館の移動図書館が県内の自治体を巡回していた時代、教育事務所単位に移動図書館振興協議会が運営されていました。その後、公共図書館の設置率も上がり、県の移動図書館は役割を終えて振興協議会が解散となり、この移動図書館振興協議会に代わる県内公共図書館を繋ぐ組織として、システム・ネットワーク専門委員会（のちネットワーク専門委員会に改称）が誕生しました。この専門委員会の特徴は、県内図書館問題の研究を行い、それに対して提案を行うことです。その最初の成果が埼玉版 ISBN 総合目録の提案とその成功に現れたといえます。今でこそ、横断検索で県内公共図書館の蔵書検索や予約が可能となっていますが、コンピュータ化された図書館システムが未導入の館が多い中、画期的なものとして相互貸借の有効なツールとなっていました。

埼玉版 ISBN 総合目録の成功のためには、各図書館で蔵書データを抽出する機能が必要なため、委員会から主な図書館システムメーカーに抽出機能を取り込むことを要望書としてお願いしたことも思い出です。

ISBN はその後桁数の不足から13桁化という変更もありましたが、総合目録として広く利用され現在に至っています。

委員会において研究を進める中で、県内図書館蔵書の保存についての問題解決をISBNの単館所蔵に見出し、研究提案の結果、各図書館の蔵書に対する単館所蔵の抽出ツールとして現在の形に引き継がれ利用されています。この資料保存においては、県内各図書館では所蔵能力が限界にあることも問題となります。保存の先進図書館の事例として講演いただいた兵庫県では、理想である共同保存庫が存在しますし、多摩地区でも保存庫の運営が始まっていました。埼玉でも何かできないかというのは、図書館職員の共通の課題であるといえます。図書館の運営形態の多様化、厳しい財政事情等図書館も新しい時代の対応が求められていますが、保存を各館で抱えるのではなく協力して考えて行こうという埼玉の公共図書館の方向性は継続して頂きたいものです。

委員会での専門委員のみなさんや県立図書館の事務局の方々との交流は、図書館で働く仕事を生業とする中で私の財産となりました。本当に良い経験をさせていただき有難かったです。システムも必要ですがより人の付き合いも大事と感じていることをお伝えして終わりとさせていただきます。

## 埼玉版 I S B N 総合目録草創のころ—図書館ネットワーク専門委員会と私

埼玉東萌短期大学附属図書館 片野 裕嗣

私は図書館システム・ネットワーク専門委員会（当時の名称）の発足時に委員となり、2期目には委員長を務めました。委員会活動の正確な記録は事務局の方でしてくださると思うので、私は当時の思い出話を書きたいと思います。現在は無いものや使われぬ言葉が随所に出てきますがご容赦ください。

想像し難いことですが、埼玉版 ISBN 総合目録草創当時はインターネット（接続）は一般にはまだ普及しておらず、ホームページやオンラインで公開された OPAC（Web-OPAC ではありません）は一部の大学図書館で開設されているに過ぎませんでした。

ISBN をキーとする総合目録の方式には、当時「千葉方式」（J-BISC を利用）と「文京方式」があり、埼玉では費用負担の少ない「文京方式」を試みることにしました。文京区立真砂図書館の桜井氏からプログラムを提供していただき、蔵書データベースから ISBN を比較的容易に抽出することができた浦和・川越・川口・所沢の4市の所蔵データでテスト版を作成しました。データの統合に時間がかかるため、このために職場のパソコンを独占するわけにはいかず、私物のノート PC（NEC の 9801 でした）を持ちこんで作業した記憶があります。作成した ISBN 総合目録テスト版をフロッピーディスクで委員に配付して、実際の相互貸借業務に使用してみたわけですが、県立図書館を介さずに他自治体の所蔵がわかるということは画期的でした。

ISBN を検索のキーとすることについては、付与率や精度などの問題がありました。それでも、増大し続ける相互貸借業務の何十パーセントかを軽減できればよい、完璧は求めない、という発想で県単位での実用化を試みたわけですが、テスト版の成果を研修会で恐る恐る報告したところ、概ね参加者の賛同を得ることができ、全県での実施に至りました。

実施後は相互貸借の効率化、迅速化が図られた一方、ユニークな蔵書を持つ中規模図書館では借用依頼の増加による業務量の増大があったとも聞いています。とは言え、利用者への迅速な資料提供に役立ったとは言えるでしょう。

私は 2002 年に川口市を辞めて岩手県内の町立図書館に勤めることになったのですが、移ってみてこの分野で埼玉県は相当進んでいたのだと実感しました。

この取組みは、県と市町村の職員の共同作業が可能な専門委員会という場がなければスムーズに実現しなかったと思います。最後に、当時お世話になった委員の方、県立図書館をはじめ県内の図書館職員の方にお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

## 図書館ネットワーク専門委員会と私

さいたま市立北図書館 中島 孝一

平成12年4月のとある日、新年度に入り、慌ただしくも落ち着かないこの時期に先輩のEさんから声がかかる。「県の専門委員会なんだけど、やってくれない？、何も難しくないから」と、ちょっと飲みにも誘われるような気がするさで、お誘いを受けたのが始まりでした。丁度、県主導の取り組みでISBN総合目録が完成したその時期でした。大きな山も終わったし、後は何もやることがないから、とか言われた記憶があります。さいたま市は、ご存じのとおり、平成13年5月に合併しましたので、合併に向けた大変な時期で、私も浦和の方と摺合せの会議に出席していたことを覚えています。特に電算機に詳しくもなく、相互貸借、協力貸出を担当し、その関係から委員になった感じでした。県立の職員さんや普段交流のない他市町の図書館員さんと触れ合えたことが貴重な経験として、今も役立っていると思っております。その後、地区図書館に異動となり2年の任期を終えた後（専門委員会は、多くが中央図書館もしくは拠点図書館から派遣している）、後任の方に席を譲りました。私もこの委員会と縁が深いのでしょうか、再び3年前にお声が掛かり、丁重な辞退にもかかわらず（中央図書館の担当様による熱心なお誘いに負けました）、再びこの場にいることが不思議な感じがします。相変わらず電算担当ではない私、委員の皆さんの会話の何割理解できているのかな、という感じで参加し、申し訳なかったのですが、楽しく仕事をさせていただき感謝しております。委員の期間中、印象深かったのは、外部講師の方と直接お話を伺うことができた点です。特に民間のブレインテックの方、そしてカーリルの吉本様との交流会はとても勉強になりこれからの図書館サービスのいいヒントが得られました。そして最も大きな収穫は、委員の皆さんとの交流でした。それぞれの図書館の事情や共通で抱えている問題なども情報交換ができ、また、行き詰っていた考えもブレークスルーできた記憶もあります。他の専門委員会でも同じでしょうが、人と人との交流が一番大切なことなんだと実感できたと思います。

図書館は、よく資料と利用者を結ぶ橋渡しと言われますが、情報技術が発達した今、図書館システムがその役割を担っている部分がとても大きいと思います。この委員会は、図書館システムに唯一関連したセクションでした。これから埼玉県内で図書館システムやネットワークに関して直面するであろう問題に、私たちができることは何なんだろうと問いかけていき、埼玉県の図書館ネットワークは日本有数と誰もが実感できるよう少しでもお手伝いできればと考えております。県立図書館のご担当者の皆様、専門委員の皆様、いろいろありがとうございました。

## 図書館ネットワーク専門委員会に参加して

朝霞市立図書館 南田 詩郎

私が図書館ネットワーク専門委員になったのは2012（平成24）年4月からでもうすでに5年委員をやらせていただいていることになる。特別にコンピュータに強いわけでもないが、何か少しでもお役に立てればと参加している。委員会の活動は、毎年年度当初にその年の研究テーマを決め、5回程度の委員会を開催し、年度末にその内容に見合った、研修会を開催するというのが1年間の流れである。記録を見ると、発足当初はシステム分科会とネットワーク分科会に分かれ23人もの委員が活動していたことがわかる。そして毎年様々な研究を行い、研修会を企画、実施してきたことが解る。また、講師として他県の図書館員を講師に招き、話を聞くことで、全国の先進事例なども知ることができた。

しかしながら発足から20年以上が経過し、新たな研究テーマを見出すことも難しくなってきた。今年はとりあえず研修会は行わずに、委員会を開催してこのようなまとめの記録を作成することになった。

本誌の「図書館ネットワークの歴史」を見ると県内の図書館のネットワークの進化の過程がよく解る。

私が図書館で働き始めたころはまだ「埼玉県立図書館合同蔵書目録」が唯一の蔵書検索手段で、自館にない資料は、この目録を丹念に調べたものだ。まだ、リクエストなどあまりない時代で、あとは県立図書館だけが頼りだった。1988年にSEARCHが始まる頃になるとリクエストも少しずつ増え始め、この相互貸借システム支えられて利用者の求める資料を提供することができるようになった。1995年に彩BISCの運用が開始されると、書名の一部や著者名からも検索が出来るようになり検索機能が向上した。この頃はこの彩BISCとJ-BISCを併用して、よく検索をした。この頃からリクエストが少しずつ増え始めたが、1999年に「埼玉版ISBN総合目録」の運用が開始され、検索機能が飛躍的に向上した。

当館では2006年に図書館ホームページを開設し併せてWEB-OPACから予約ができるようになると、予約件数は激増した。そしてこの頃から自館に所蔵のない資料へのリクエストが多くなった。そんな折「埼玉県内公立図書館等横断検索システム」の運用が開始され、多いに活用するようになった。すでに運用開始から10年が過ぎて、今では利用者も直接利用して、所蔵館を確認した上でリクエストしてくることも多くなった。

また、当館も開館30年を迎え、書庫の収容能力も限界に達している。他の図書館も同様のところが多いだろうが、県の分担収集に助けられることも多い。雑誌などは県立図書館がバックナンバーを引き取ってくれるので、安心して除籍ができる。2013〔平成25〕年度の研修で話を聞いた滋賀県立図書館は、将来に備え十分な書庫スペースを用意し県内の図書館の除籍本を積極的に受け入れ保存していて感心した。

これからも様々な課題が出てくるだろうが、県内図書館の業務の支えになるような委員会でありたいと思う。

このたび「図書館ネットワーク専門委員会の歩み」を刊行させていただくにあたり、現在の委員として寄稿をすることになりました。いきさつなどを紹介しながら、これまでを振り返ってみたいと思います。

平成 23 年 4 月、川越市に図書館職員として配属されてからようやく 2 年が経過したというところで、県立図書館の事務局からネットワーク専門委員会への参加の依頼がありました。若輩者で恐縮しましたが、上司の後押しもあり「何事も経験である」と考え、お引き受けいたしました。

実際、委員会参加当初はわからないことだらけで、驚きの連続でした。なにしろ私が図書館に配属された時点では、すでにシステムもネットワークも整備されていましたから、そこにいたるまでの積み重ねや苦労について想像が及ばなかったのです。備え付けてあるパソコンを使用すればすぐに所蔵調査が可能で、結果もすぐに知ることが出来るのは当たり前のことであると考えてしていました。ISBN 総合目録や相互貸借システム、単館所蔵資料のデータもネットワーク専門委員会の成果物と知り、驚いたのをよく覚えています。

委員会が開かれるたび、先輩方にその歴史的経緯や現在の状況について会話の中で少しずつ教わりました。知識も経験も無い自分に何が出来るか、手探りの日々でした。

数あるテーマのなかで思い出深いのは平成 25 年に行われた資料保存協力体制の見直しです。ネットワーク専門委員会を含んだ拡大検討委員会として開かれました。県内で単館のみが所蔵している資料は貴重なため保存をすることになっていましたが、書庫を圧迫する原因でもあるため、条項の整理を行ったものです。話し合いを重ねることで少しずつ現行の文章を修正し、現在の状況に即しつつもなるべく資料を保存していきたい気持ちがあらわれた要領が完成しました。

この資料保存の要領は 5 年を目安に見直しをすることになっています。今年度でいったん休止となるネットワーク専門委員会ですが、例えばこの見直しで特別委員会等として再び開催されることがあるかもしれません。その際には状況が許す限りまた参加したいと思っています。

専門委員の先輩方や県立図書館の事務局の方々との交流は、私にとって大きな財産となっています。今後もこの関係を大切にしつつ、図書館や職員の交流の輪が途切れないよう、また大きく広がっていくよう働きかけ続けることも、図書館のつながりを支えるネットワーク専門委員としての大きな役割では無いかと考えています。6 年間、どうもありがとうございました。

図書館ネットワーク専門委員会は、平成 7 年に発足し、平成 28 年度までの 22 年間にわたって、県内図書館のネットワーク活性化のための活動を行ってきた。その長い活動の中で、1 年間、委員として携わらせていただいた。ネットワークに関して何か特別な知識があるわけでもなく、図書館経験も浅い身でありながら、活動を締める重要な年度で委員会に参加させていただけたことは、私自身にとって大変刺激となった。現委員の方々はもちろんのこと、これまで委員会を支えてきた委員の方々にも、お世話になりましたことを御礼申し上げます。

前述の通り、私は図書館ネットワークについては一般的な図書館職員程度の知識しか持ち合わせておらず、この委員会で見聞したことはほとんどが自分にとって新しいものであった。委員会の歴史については言うまでもなく、例えば相互貸借での資料検索方法についても、恥ずかしながら、横断検索や ISBN 総合目録までの知識しか持っていなかった。多くの図書館職員の多大な苦労があったおかげで、今私達が、不自由なく横断検索できる環境にいられるのだと思うと、そうした歴史を知らないでいたことが大変申し訳ないことだったと感じる。ただ、こうしたことを知らないでいるのは私だけではない（はずだ）。

現在の新社会人の多くは、幼少期で既にインターネット環境が存在していた。図書館ネットワークの分野も、インターネットと同じように日々進歩しており、ネットワーク上で資料の所蔵状況を管理し、OPAC で公開することが 90 年代には可能になっていた。若い世代にとって、近くの図書館に求めたい資料があるかどうかを探すためにまずインターネットブラウザを開く、という動作は子供の頃からの常識なのである。そうした環境に取り巻かれていては、図書館職員でさえ、書籍の合同蔵書目録でまず県立の資料所蔵を調べて、所蔵がなければ県内各館に確認し……といったような相互貸借のやり取りなどを想像するのは難しいだろう。

むろん、誰もが、図書館ネットワーク環境が整う以前のやり方で資料を探せなければならない、というわけではない。図書館員が迅速に資料を探し出せるということは、図書館利用者の時間を節約することにつながり、むしろ積極的に新しい（速い）やり方を用いるべきである。

ただ、以前の環境の図書館職員にとっても、当時、最も手間の少ないやり方で、利用者の負担を軽減しようと努めていたのである。そこからさらに、「もっと利用者を待たせずに済む方法はないか？」という思いから、今の環境が生まれたことは、これからの若い世代の図書館職員にも知っていてほしいと思う。そして、その精神に倣って、今以上に利用者の利便を考えた環境をつくっていくことが、これからの課題となるだろう。

私自身も、これからの図書館を担っていく身として、幸運にもこの委員会に携われた経験を活かし、さらなる図書館の進歩を目指していきたいと思う。

## 図書館ネットワーク専門委員会に参加して

加須市立加須図書館 阿部 浩和

図書館オープンに関わり、手探りで図書館業務をしていましたが、一段落して感じたことは、「この場合の対応ってこうで良いのかなあ?」「たぶん基本的な業務だと思うけど隣の(図書)館ではどうやっているのかな?」と、意外に細かい部分で判断に迷うことがある点。

もちろん県立図書館などに問い合わせすれば、回答は得られますが、突然電話して聞くにしても、担当が色々あるので、誰に聞けば良いのか…と思案することもありました。

そんな中、埼玉県図書館協会に専門委員会というのがあり、ちょうど2年任期の改選時期のため専門委員立候補者募集とのことで、図書館ネットワーク専門委員会に立候補したのが始まりで、平成19年度からの参加でした。

この年は、「図書館と県民のつどい埼玉2007」というイベントの最初の年で、各専門委員会で分科会を実施しました。

図書館ネットワーク専門委員会でも「図書館ネットワーク」について県民のみなさんに知ってもらおうと、分科会の他、この「歩み」には掲載できませんでしたが、「よくわかる図書館ネットワーク」のパネルは、休館日に委員が集まって、絵コンテの構図を元に撮影するなどし、開催当日に向けてパネルやスライドショーを作りました。

「つどい」というイベントがあったおかげで、当時のメンバーとも打ち解けることができ、ちょっとした質問も気軽にできるようになりました。

その後も、専門委員を続け、改めて見直すと、油橋さんに次いで長い在籍年数で、現在は図書館ネットワーク専門委員会の委員長もしているというのは不思議な感じがすると同時に、県内図書館職員の多くの知り合いができたことは、公私ともに素晴らしく感じます。

また、図書館ネットワーク専門委員会では、年に一度研修会を開き、外部講師に先進事例などの講演をしていただいています。驚きや発見も多く、人のネットワークの大切さに気付かされます。

私は近年、図書館新任職員研修の「図書館協力について」の一講座を任せていただいています。そこで「人・物・情報を結ぶのが図書館であり、図書館ネットワークである」という表現を使っています。もちろん、一期一会となる方もいるとは思いますが、各自治体など所属は別でありながら、業務の相談や協力体制ができてるのは、「図書館ならでは」といつも思っています。

図書館ネットワーク専門委員会に参加して、得たものは大きいので、関わった全ての人に感謝し、これからも大切にしながら、逆に図書館界に還元できるように、これからも努力していこうと思っています。



私は、図書館ネットワーク専門委員会に、事務局として三回携わることになった。この場では、そのときどきの裏方の出来事を振り返ってみたい。

最初に事務局を務めたのは平成 11 年度から 13 年度までの三年間で、埼玉版 ISBN 総合目録が本格稼動した時期にあたる。「埼玉版 ISBN 総合目録運用に関する申合せ」を取りまとめ、稼動後の「図書館間貸出調査の集計」等を行っていたが、そんな中で「図書館雑誌」から依頼を受け、経緯と現状をまとめた原稿を執筆した。この時期、ISBN 目録が全国的にも注目されていたひとつの証左といえようか。

二回目は平成 17 年度、18 年度の二年間。この時、大きな課題となったのが、ISBN の 13 桁化であった。幸いデータの統合や検索については、ISBN 総合目録の開発者によって、10 桁、13 桁どちらにも対応できるようになったのだが、問題は MARC の方にあった。一部の MARC では 13 桁の最初の 3 桁[978]を削除しただけのデータが提供されており、そのままでは末尾のチェックデジットが不正になるため、エラーとなってしまっていた。そこでエラーデータに再度[978]を付加して、再統合する方法をとることにした。しかし、個々の ISBN に一個一個[978]を付けていくこともできない。その作業を効率化するために MS-Access を使用することにしたのだが、ほとんど使ったことのないデータベースソフトに四苦八苦しなから少しずつプログラムを組み上げ、なんとか使える状態になるまで半年以上かかったのではなかったか。この不完全な 10 桁 ISBN は現在も残ったままであり、再統合作業はいまだに続いている。

三回目は平成 26 年度から現在に至る。この時期にテーマとして取り上げたのは、いずれも Web 関連の事柄で、Web 環境を利用しさらなる展開を図ろうとするものだった。当専門委員会で平成 11 年度に OPAC の調査をした際、県内で Web に公開していた公共図書館がわずかに 3 館だったことを考えると、当専門委員会が発足してからの 20 年はネットワークと Web の時代だったと思う。

事務局として、委員会運営の大きな柱の一つに研修会がある。講師は、伝手を頼ることもあったが、人探しから依頼、日程調整、そして手ごろな会場探しも毎回のようによく苦勞し、研修会の当日までやきもきすることの連続だった。調査・研究に即したテーマの研修会を企画してきたが、図書館のネットワークが整ってくると共に関心が薄れてきたせいだろうか、当初ほど参加者が集まらなくなってしまうのは残念だった。

事務局の仕事を通じて、多くの市町村図書館の皆さんと知り合えたことは、なによりの経験だったと思う。専門委員会に限らず、顔見知りになった方には無理なお願いをしたこともあったが、ご容赦いただければ幸いである。